

# 親族名称およびアメリカにおける親族組織

佐 藤 英 夫

## はじめに

日本における親族とは、まず親族の意義において「……いかなる者を親族とするかは、各時代、各社会における親族共同生活の特殊性によって定まる。法律は、この親族共同生活をなす者のなかから法律が予定する事項について相互協力をさせるため必要と考えるものを選び出し、これを法律上の親族としている。……民法は六親等内の血族、配偶者および三親等内の姻族をもって親族としている。」<sup>1)</sup>とあり、その他のものは、道德、宗教、風俗、慣習などにまかされていて、法律上の親族と風俗上の親族とはその範囲において必ずしも一致しない。またその範囲においては次のように記されている。まず、図式化してみる。(次ページ図参照)<sup>2)</sup>

同じ著書のなかから語句説明も引用しておこう。

### 1. 親系

親系というのは、血統の連絡関係による系統である。したがって、血族間には親系があるが、配偶者間には親系がない。親族関係は、配偶者を除いてつぎのように区別される。

#### (1) 直系親・傍系親

この分類は、もっとも親系的分類である。

① 直系親とは、血統が直下するかたちで連絡する親族である。例えば父と子、祖父母と孫などがこれに属する。

② 傍系親とは、血族が共同始祖から分れて連絡する親族をいう。例え

親 族 範 囲 の 図

傍 系	直 系	傍 系
六世の祖⑥		
↓		
五世の祖⑤		
↓		
高祖父母の兄妹⑥	高祖父母④	
↓		
曾祖父母の兄妹⑤	曾祖父母③	曾祖父母③
↓		
曾祖父母の兄妹の子⑥	従曾祖父母④	従曾祖父母④
↓		
従祖伯叔父母⑤	伯叔父母③	伯叔父母③
↓		
再従兄妹⑥	従兄妹④	再従兄妹⑥
↓		
従兄妹の子⑤	甥姪③	甥姪③
↓		
従兄妹の孫⑥	兄妹の孫④	従兄妹の孫⑥
↓		
従兄妹の曾孫⑤	兄妹の曾孫⑤	従兄妹の曾孫⑤
↓		
従兄妹の玄孫⑥	兄妹の玄孫⑥	従兄妹の玄孫⑥
↓		
五世の孫⑤		
↓		
六世の孫⑥		

血 族	姻 族
自分	配偶者

上の点線から上は尊属親で、下の点線から下は卑属親である。  
数字は親等を示す。兄妹は兄弟姉妹の略である。

ば兄弟姉妹間、伯叔父母と甥姪との関係である。これらの場合は、血族に関するものであり、通常、直系血族あるいは傍系血族といわれるが、姻族についても直系・傍系の別はある。例えば、妻の父母・祖父母などは妻の直系親であるから、直系の姻族であるし、妻の兄弟姉妹は、妻から傍系親になるから、傍系の姻族である。

## (2) 尊属親・卑属親

この分類は、正確には親系的分類といえない。

- ① 尊属親とは、父祖および父祖と同世代にある親族をいう。例えば父母・祖父母・伯叔父母などが、これに属する。
- ② 卑属親とは、子孫および子孫と同世代にある親族をいう。例えば子・孫・甥・姪などが、これに属する。
- ③ 自分と同じ世代にある者。例えば兄弟姉妹・従兄弟姉妹などは、尊属親でも卑属親でもない。
- ④ 尊属親・卑属親の区別は、通常、直系親の場合に用いられ、直系尊属・直系卑属といわれる。

## (3) 父系親・母系親

- ① ある人がその父を通じて他のある人と血族である場合には、その血族間における親系を父系という。
- ② ある人がその母を通じて他のある人と血族である場合には、その血族間における親系を母系という。したがって、同父異母の兄弟姉妹は相互に父系親であり、異父同母の兄弟姉妹は相互に母系親である。同父同母の兄弟姉妹は相互に父系親であると同時に母系親でもある。<sup>3)</sup>

これが日本における法解釈である。

帰化したアメリカ人、M-G. ジョン・ド・クレブクールは「私の知っているある家族などは、祖父がイギリス人、その妻がオランダ人であって、その息子はフランス女性と結婚し、生まれた四人の息子たちは現在みな違った国籍の妻をもっている。自分の古くからの偏見と風習を捨てて、自

分の受け入れた新しい生活様式から新しい偏見と風習を受け入れる者、彼こそがアメリカ人なのである。……ここでは、あらゆる国の人びとが融合して一つの新しい人種となっている。<sup>4)</sup>」と書いた通り、ここでは特定の民族集団のそれについてではなく、ごく一般的なアメリカ社会についてのものである。

アメリカの親族組織は、父系的もしくは母系的といった単系的な親族制度に対して、父方・母方の両系に均等な重みと抔りをもち、この両系的親族制度において、人びとが自己の親族的な源流を父方や母方の一方に限った求め方をしないで、両方に均等を求める両系的直系 (bilateral descent) によって特徴づけられており、基礎的な親族集団といえ、拡大家族 (extended family) や複婚家族 (polygamous family) とともに現存する類型の一つとされている核家族 (nuclear family)、つまり一組の夫婦と独立前の子女からなる一代家族の三つからできているようである。

この核家族は、そのままいわば家族の核として、いかなる種類の家族形態においても、その構造的の基本単位となるものであって、前の両類型も二つ以上の核が、拡大家族の場合には縦に連鎖し、複婚家族の場合には横に連鎖するものであるとされるもの<sup>5)</sup>と、血族 (Kindred) とである。日本の家族法による血族とは、血縁のある者または血縁があると同視せられるものを血族という。前者を自然血族、後者を法定血族とよぶ。<sup>6)</sup>ということから一般的に親戚・姻族と呼ばれるものに近いものに相当する。また婚姻は単婚制 (monogamous) であり、居住は新居住制 (neo-local) をとっている。また財産相続は遺言状にもとづく贈与によっているようである。

親族の範囲は比較的狭く、職業的組織のような他の諸制度から厳しく分離される傾向があるので、その結果、経済や技術のような複雑な分岐した制度などと比べて見ると小さなものとなっているようである。

親族名称上、父は父の兄弟から区別され、母も母の姉妹から区別されているが、一方、両親の兄弟姉妹 (sibling) は互いに性別によって区別され

ている。傍系親族意識 (collaterality)——血統が直下するかたちで連絡する親族である。例えば、父と子、祖父母と孫などがこれにあたる直系親の対概念で、血族が共同始祖から分れて連絡する親族をいう。例えば兄弟姉妹間、伯叔父母と甥姪との関係である。<sup>7)</sup>——によっては区別されていないのである。交叉いところ (cross cousin)——親同士が兄妹または姉弟の間柄で、互いに異性のいところ——や並行いところ (parallel cousin)——親同士が兄弟または姉妹の間柄のいところ——などは一つのグループにまとめて呼ばれ、兄弟姉妹の子供たちから区別されている。ただし後者の場合は、性別によってのみ互いに区別されているにすぎないようである。

日本人はおおかたそうであろうが、「例えば私の場合は、アメリカ人から、これは私のブラザーですとか、私のシスターですとか言われる時、一種のとまどいのようなものを感じるのである。つまりもう一つ進んで、兄なのか弟なのか、また姉なのか妹なのかを知りたい気持が動くのである。そしてこのことが理解されないと、交際していく上で何らかの支障があるような不安が自然とつきまとうのである。前述のようにアメリカでの生活組織の場合、ブラザーやシスターで充分なのであるが、私たちは長い間、兄は兄、弟は弟という形で人間関係を考えることに慣れ、その関係をふまえた上で応接する習慣に染まってきたことを今更のように考えずにはいられない。」<sup>8)</sup>日本における親族関係は前図の通りであるが、観念的には血縁と婚姻とを媒介とするものであるので、無限に拡大されることになるのであるが、民法においてその範囲を(1) 六等親内の血族、(2) 配偶者、(3) 三等親内の姻族に限定されているのである。—民法725条—

## アメリカの親族名称組織の性格

親族員に対する名称のアメリカ的組織における基礎的性格は、選択使用できる一連の名称が広範に存するところであろう。

母は，“mother”，“mom”，“ma”，“mummy”，“mama”，などと呼ばれるのが代表的であり，ファースト・ネームやニック・ネーム，あるいは指小語（diminutive）——愛称・親称を含む——で，または“old woman”と呼ばれたり，種々さまざまな名称で呼ばれている。

父は“father”，“pop”，“pa”，“dad”，“daddy”，などと呼ばれ，ファースト・ネームやニック・ネーム，あるいは指小語の“old man”，“boss”，などと，やはり種々さまざまに呼ばれている。

叔父は“uncle＋誰々”，とファースト・ネームを添えて使われたり，あるいはファースト・ネームだけで呼ばれたり，またアंकルとだけいう呼び方で呼びかけられたりする。叔母についても，全く叔父の時と同様である。

選択使用できる一連の名称は，次のように二つの別の仕組みを加えることによって増やされることがある。

一つは「所有格＋名詞」の使用である。例えば，“mother”は“my mother”のように，誰にとっての関係であるかを特に言い添えるという形の変化の場合である。

引合いに出す時の親族名称が使われる場合においては，普通少なくとも三人の人が含まれている。つまり話す人と話しかけられる人，そしてもう一人は話の引合いに出される人の三人である。アメリカにおいて，第三者を引合いに出す時，まず第一に“my mother”のように話す人に対する関係において，次に“your father”のように話し相手に対する関係において，更に子供本位呼称におけるように，必ずしもそこにいない誰かに対する関係の場合には，「誰々のおばさん」などと呼んでいる。例えば，母の姉妹の息子に対して，母の姉妹に関して話をする場合には，“your mother”とか“Aunt Mary”という呼び方になるのである。選択使用できる一連の名称に，広範な変化があることと密接な関係をもっている事実は，引合いに出す場合の名称にしても，話しかける相手に対する名称にしても，状況に

よってさまざまに異ってくるということがわかるのである。

一定の親族に対して、どんな場合にも使用されるような、ただ一つの呼びかけ呼称の形式、ただ一つの引合いに出す場合の名称の形式を示すことは、事実上不可能である。

換言するならば、呼びかけの場合の呼称と、引合いに出す場合の名称との区別は、特定のいくつかの重要な過程をあいまいにってしまう傾向になり、少なくともあいまいにする理由の一部は、それが親族員を引合いに出す時は常にただ一つの名称だけしか存在しないと考えられてしまうからである。

“second cousin” という名称のように、いくつかの形式は呼びかけには決して使用されず、引合いに出す場合のみ使用されるものがあることは事実のようである。しかしその使用も、親族員を引合いに出す時の状況の中の限られた状況の場合のみに使用が許されているようである。つまり“second cousin” という名称は、例えば質問が明確にあるいは暗黙のうちにそれと理解できる内容で、“What do you have to do with him (or her)?” とか “Is he (or she) any relation to you?” のような状況に限られているようである。しかし親族員を引合いに出す状況は他にもいくつも生じてきて、そこで仮りに用いられることがあっても、“second cousin” の名称は使用される率が少ないようである。例えば、自分の父や母に対して、“How is your cousin John getting on lately?” とか “How is Mr. John getting on lately?” のように質問することがあるようであるが、  
.....  
“Well, how is your second cousin John getting on lately?” のような問いかけはしないのである。もし役立てうる形式がただ一つしかないとするならば、その一つの形式はあらゆる場合に使用されるのが当然であろう。がしかし、もし二つの形式、一つは呼びかけのため、もう一つは引合いに出すためとするならば、状況の一般的な範疇が、この二つだけに分化されていれば理解しやすくなるのであろうが、現代アメリカの親族組織において

は、選択使用できる一連の名称の広範な変化が、アメリカ人たちにたくさんの異った状況を分化させてしまった感じがあるのである。

例えば、ある人は自分の父と話をしている時に、彼の母を“mother”と言い、自分の兄弟と話している時には、“ma”とか“mom”と言い、叔父と話をしている時には、“my mother”と言い表わす場合と、別の人のように前の人とは違った言い表わし方を使用し、例えば自分の妻の母(mother-in-law)について自分の妻と話をしている時は、普通は“mom”と呼んでいるが、彼自身の母と彼の義母の両方とも居合わせている場合などは、意識して義母を呼ぶことを避けるという場合もあるようである。更に人によっては、自分の父と話をしている時には、父の兄弟を呼ぶ場合、“Uncle John”のように呼び、彼に関する話を、彼のことを知らない第三者の誰かに話をしている時には、“my uncle”と呼ぶ場合などである。

それぞれの名称は二つの局面、あるいは機能を持っているようである。一つは分類する側面と、二つ目は役割、もしくは関係表示の側面とである。

一つ目の分類する側面とは、親族員たちの別々な諸範疇が血統系譜的に割当てられる親等を意味し、役割もしくは関係表示の側面とは、その名称が象徴している行動、あるいは関係の様式を意味しているようである。

このようにして見てみると、例えば、“father”という名称は、一つは親族員のある親等を限定し、二つは親等づけられているその人の役割を象徴しているという二つの事柄を意味しているのである。一つ目の場合はその親等にはただ一つの血統系譜的範疇があるだけであることから、相対的に言っても権威主義的なものと言わざるを得ないものである。

「アメリカの家庭では、親と子の世界が別々で、しかも個々のメンバーの役割分担をとおして家族に貢献することが前提とされ、しつけは夫婦共通の仕事であり、ルールを守ることの強制と違反に対する制裁という形でおこなわれるのが原則となっている。このような全体的な状況のなかであられるのがアメリカ人の家庭のふんいきである。日本のようにどちらか



といえば、母と子の愛情というような、特定の人間関係に強く結びつきながら生じる状況とは違うのである。そしてアメリカでは家庭のふんいき作りの最高責任者は父と考えられているのである。もちろんアメリカの家庭でも、人間関係はきわめて重要であり、とりわけ母と子のそれは、子どもにとって何にも増して大きな意味をもっているのは当然である。<sup>9)</sup> このような区分を取っていくと、やはり疑問が生じてくるのである。種々の選択使用できる一連の名称は果たしてそれらの分類なのか、あるいは関係表示なのか、それともその双方の側面においてなのか、それいづれによって名称を選んだらよいのかとすることである。

換言するならば、その選択使用できる一連の名称は、相互に単なる同義語であるのか、もしくはその意味において何らかの重要な相違があるのか、とすることである。仮りに意味においてそれほど重要な相違があるとすれば、それは親族員たちと分類する方式に中心が置かれているものなのか、あるいは彼等が営んでいる役割に置かれているものなのか、更にこの双方に相互関係をもって置かれているものであるのかと云う疑問である。“father”, “papa”, “pa”, “pop”, “dad”, “daddy”, の一連においては、自分を生みだした人そのものを指していることから、これらすべての名称の秩序づけする側面は全く同一であるということが理解できるようである。“mother”, “ma”, “mom”, “mama”, “mummy”, の一連においても、それを分類する側面において、親族員の同じ親等、つまり自分の母と云うただ一つの範疇を指していることから、同様のことが言えるようである。

前の親族範囲の図でも理解できるように、父は決して父の兄弟と一緒に分類に入っていないし、母も母の姉妹や父の姉妹と一緒に分類されていない。兄弟と姉妹は決して平行従兄弟姉妹や交叉従兄弟姉妹と一括分類されないし、息子や娘は決して兄弟の子や姉妹の子と一緒に分類されていない。

選択使用できる一連の名称のうち、いくつかはその分類の線をよぎっている。例えば、両親という名称は、母を父と一緒にの分類に入れてあるし、子供（たち）という名称は、息子と娘とを一緒にし、兄弟姉妹という名称も兄弟と姉妹と一緒にの分類に入れられている。

一方、相違があると思はれる役割表示的な側面について考えて見ることにしよう。

異なった選択使用できる一連の名称は当然のことながら異なった役割ないしは関係を表示している。ある時は、はっきりとその関係を強調表示している場合もあるようである。

父や母の名称について普通の人たちは、原則的な名称と別形型の名称を使用しているようである。原則的な名称としては、男性の場合は“dad”であり、女性の場合は“daddy”になる。また別形型の名称になると、男性の場合は“father”になり、女性の場合は“dad”を使う人の方が多いようである。そこで原則的名称としても、また別形型名称としても共に“father”を使ったとした場合には、その人たちは決して“pop”や“pa”を選択使用できる一連の名称としては使わないようである。

逆に、“pop”や“pa”を原則的名称としても、また別名称としても使用する人々は、選択使用できる一連の名称として、“father”を使う人は殆んどいないようである。これらの両グループは共に、“pop”や“pa”を使わずに、“pop”や“pa”を使う方のグループは“father”を使わないようである。これは“father”を使う人たちは、“pop”や“pa”を使った場合に、相手に対してあまりにも平等主義的であるし、無礼に近くなるとの理由をあげているようである。“father”という名称は、公式的な感じと、權威のやわらげられた含みと、それに伴う尊敬のさまざまな形を兼ね含んでいるようである。逆に、“pop”や“pa”は非公式性と、親密性とを兼ね含んでおり、權威や尊敬が第一次的な含みを持たない使い方のようである。その点において、“dad”は前の両方の役割が重なり合っていると思はれるので

ある。

次に母の名称についてであるが、父の名称の場合とその状況において多少の相違があるようである。すなわちそれらの名称によって示されている役割は、殆んどの人たちに相互に入れ換えできるものであると思はせるほど近接しているようである。つまり“pop”と“father”が相互に矛盾する役割を意味していたのに対して、母を呼ぶ名称については、厳密な区別は少ないようである。ただし、母を呼ぶ名称の中で顕著な相違があるとするならば、それは話し手の性別によってのようである。女性の話し手は大体において、“mother”を使い、“ma”という呼び方は比較的に少ないようである。反対に男性の話し手は、“mom”を使い、“mother”や“ma”を使う人は極めて少ないようである。

公式的名称の“father”は同じ公式的名称の“mother”と比較して見ても、その使われ方は非常に少ないようである。そしてこの徴候は“father”と“mother”との二つの名称との間には、単純な均衡といったものが存在しないことが理解できるのである。

“father”なる名称の中には、公式性と尊敬の含みを有しているのに対して、“mother”という名称には稀少のようである。例えば、父と論争している時などは、どんな形の呼びかけ名称をも使わないと言う人々の間にも、母との論争の場合には、“Well, mother”, とか “But, mom”, のように間投詞をまじえて使っているようである。このように母という名称に対する選択的な諸役割の間には、一種の同質性が存在しているようであるが、それは父の諸役割については表われていないのである。それは“dad”から始まって、公式性や尊敬や権威えの方向と、親密さや仲間感えの方向と二方向の変化が何んらかの程度において、「あれかこれか」の選択と理解してもよいものと考えられよう。

次に親族名称の使用における時期的な変化について考えて見ることにしよう。

小さな子供たちは男性も女性も性別に関係なく“daddy”とか“mummy”を使う例が多いようである。これは明らかに非公式的な名称である。がしかし、同じ人が成長するにつれて、男性の場合には父に対して、“dad”，母に対して“mom”や“ma”に変化している。

女性の人の場合は父には“daddy”を用い続けているようであるが、母に対しては“mother”に変化している。つまりもし，“dad”や“mother”が“daddy”や“ma”よりも公式的であると見るならば、時の経過とともに両親のうち、自分と同性の者については相対的に言ってより多く公式的になるようであるのに対して、異性の親には公式的でない状態を続ける傾向にあるようである。

次に叔父や叔母の名称についての使われ方はどうであろうか。

“aunt”あるいは“uncle+ファースト・ネーム”の組み合わせが最も多く使われているようである。がしかし、ファースト・ネームだけを使用する場合もあり、この両者の使われ方の相違について考えて見ると次のようなことが理解できるであろう。

まず、ファースト・ネームだけで呼ぶ呼び方の場合は、父系よりも母系の叔父や叔母に対して適用される傾向が強いようである。

次に男性の話し手の場合において、女性よりもファースト・ネームを使う傾向が多いようである。これは女性が意識の中に男性よりも親族との間柄にかかわりあいをもち、充分なる配慮の念を示していることを意味しているようである。第三に、このファースト・ネームだけの使用は叔父や叔母と対等の役割をもっていることを意味している場合である。大部分の人々は“aunt”や“uncle”という名称を使わずに、ファースト・ネームだけを用いる時期は、自分たちが叔父や叔母と同じ水準に立ち、自他ともに認められる時に公式的名称が省略されているようである。つまり、ファースト・ネームは‘その人’と‘話す人’との対等さか、あるいは‘その人’の劣等さかを意味しているようであり、‘その人’に対する感情

が穏やかな場合には、また身分関係が親族範疇において、期待されている程度であれば、“uncle”という名称が使用されるようである。

自分と叔父や叔母たちとの関係において三つの可能性がありうるということは、

- (1) その関係が非常に接近し、温かく、親密でしかも平等的立場をともにしている場合、
- (2) 反対に非常に敵対的であって、しかもその感情をはっきりと表わす場合とそうでない場合、
- (3) 主として親族関係の点からなされる考慮に従う場合、

この三つの場合がありうるようである。このようにして名称の選択的形式としてのファースト・ネームの使用は、祖父母を除いてあらゆる親等の親族員たちを呼ぶ選択使用できる一連の名称となっており、自分と同世代か、もしくは自分より下の世代の親族員たちを呼ぶのに適した呼び方の方である。

第一次的な呼び方として父にファースト・ネームを用いる場合は稀少としても、両親が子供たちを呼ぶのに使う原則的な名称がファースト・ネームであり、ニック・ネームであり、指小語のようである。そして叔父や叔母に用いる原則的な名称としてのファースト・ネームは、強い親愛感が表われるある場合には使用されるようである。

その強い親愛感のある場合を考えて見ると、親愛感が単に存在しているということではなく、その強い親愛感が叔父と甥、または叔母と姪との間の関係についての一般的な概念とは根本的に異なった関係を意味しているようである。つまりその関係は、親族関係というよりもむしろ人間個々の友人関係に近い状態になるようである。

もし叔父や叔母たちがファースト・ネームだけで呼ばれているならば、それはその関係のありかたの基本的な傾向は、あくまでも個人対個人の関係であって、“uncle”と呼ばないとするならば、それは親族関係を構成す

る普通の要素とは異なった，‘あの人は信頼できない’，とか‘あの人は卑しい’とかいったその特定の人の個人的な性質による傾向が強いようである。ファースト・ネームを使うと言うことは，個人的なものをまず考慮に入れることをその支配的性格としているような間柄を表わしている印象を受けるのである。

「アメリカの親は，ルールに忠実で従順な子を望む反面，親子関係以外の局面では，自分で考え，自分で行動する子，つまり自主独立の気概を持つ子を強く希望している。いうまでもなく独立の精神はいわばアメリカの精神であり，一切のしつけの基調は言わず語らずこれにつながっていると言える。従って従順ということも，目標というよりはむしろ手段であり，その領域も親子の関係しあう局面に限定されているとい<sup>10)</sup>ってよい。」つまり彼等の間には明らかに親族の紐帯があり，その間柄について親の強調する局面は個人としての子の性質であって，親族としての役割を履行することが最終目標とは見られていないようである。“uncle”や“aunt”という呼び方においては，ファースト・ネームだけの使い方や，親族名称だけの使い方よりはむしろその複合使用，つまりファースト・ネームと親族名称とを組み合わせる傾向が一般的のようである。アメリカの親族組織は，全ての叔父を一括して分類に入れておき，その上でその分類に属する人々を小分けしているようである。例えば，二人の叔父が同じファースト・ネームをもっている場合でさえも，叔父という範疇の中で，その呼び方は実際にはほとんど常に区別されているからである。

次は夫と妻の名称についての選択使用できる一連の名称についてであるが，これは次の三つに大別できるようである。

(1) 親族名称そのもの，(2) 名前からの変化，そして(3) 愛称の三つである。

さらに(1)の親族名称は，親族秩序を示すために用いられる語，すなわち，彼もしくは彼女が‘誰’であるかを主として説明する，引合いに出す場合の名称，“my wife”，“my husband”とか“Mrs. ○○”，“Mr. ○○”

## 親族名称およびアメリカにおける親族組織

などである。また両親名称、すなわち妻は, “mother”, “mom”, “my old woman” などと呼ばれ, 夫は, “father”, “dad”, “papa”, “my old man” などと呼ばれるかに分かれて使われている。

(2)の名前からの変化は, アメリカにおけるファースト・ネームの男性, 女性上位10傑の例をとって見ると次のようになる。

### (イ) 男性の場合

“John → Jack, Johnnie, Johnny”  
“William → Bill, Billy, Willy, etc.”  
“Charles → Charley, Chack, etc.”  
“James → Jamie, Jim, Jimmy, etc.”  
“Robert → Bob, Bobby, Dob, etc.”  
“Thomas → Tom, Tommy, Tam, etc.”  
“Henry → Hal, Hank, Harry,”  
“Joseph → Jo, Joey, etc.”  
“Edward → Ed, Ned, Ted, etc.”  
“Richard → Dick, Rick, Richie, etc.”

### (ロ) 女性の場合

“Mary → Mamie, Moll, Polly, etc.”  
“Elizabeth → Bess, Beth, Betty, etc.”  
“Barbara → Bab, Babbie, Babs, etc.”  
“Dorothy → Dol, Dolly, Dora, etc.”  
“Helen → Nell, Nellie, Lina, etc.”  
“Margaret → Madge, Maggie, Peggy, etc.”  
“Patricia → Pat, Patsy, Patty, etc.”  
“Virginia → Ginger, Ginnie, Virgie,”  
“Jane → Janie, Jenny, Janet, etc.”  
“Alice → Allie, Ally”

のように使われるものである。ここでニック・ネームに由来する姓の代表例もあげて見よう。

### ニック・ネームに由来する姓の代表例

#### (a) 記述的と思われるニック・ネームに由来する姓

姓	原 義	姓	原 義
Brown(e)	色黒の顔をした人	{ Small	
White	色白の顔をした人	{ Short	背の低い人
{ Read		{ Little	
{ Reed	赤い髪をした人	{ Crisp	
{ Reid		{ Cripps	巻毛の人
{ Gray	白髪の人	Whitehead	白髪の人
{ Grey		Pollard	短い髪をした人
{ Black	色黒の顔をした人	Ballard	禿頭の人
{ Blake		{ Strong	力の強い人
{ Long	背の高い人	{ Strang	
{ Lang	気転のきく人	Turnbull	力の強い人
Sharp(e)	(機敏な戦士)	Snell	大胆な人
{ Bright	金髪の人	Swift	足の速い人
{ Burt		Gay	陽気な人
{ Keen	機敏な戦士	{ Moody	勇敢な人
{ Kean(e)		{ Mudie	
Armstrong	腕ぶしの強い人	{ Blyth(e)	陽気な人
Pratt	ずるかしこい	{ Bly	
Dunn(e)	肌の黒い、色黒の	{ Crook(e)	足の曲った人
Wise	賢者、学者	{ Crookshanks	
{ Bones	やせた人		
{ Baines			

#### (b) 隠喩的につけられたニック・ネームに由来する姓

姓	原 義	姓	原 義
Peacock	くじゃく(派手な服をきた人)	Crow(e)	からす(黒髪の人)
Finch	すずめ科の小鳥(陽気な人)	Hawke	たか(どう猛な人)
Swan	白鳥(優美な人)	Partridge	しゃこ(肥った人)
		Crane	鶴(やせた足の長い人)
		Rook	みやまからす(黒髪の人)



親族名称およびアメリカにおける親族組織

Woodcock	木つつき（馬鹿な人）	Bull	雄牛（力強く不動の人）
Dove	鳩（やさしい人）	Lamb	子羊（活発で陽気な人） （巻毛の多い人）
Sparrow	すずめ（派手に口論する人）	Buck	雄じか（機敏な狩人）
Raven	大カラス（黒い髪の人）	Wolf	狼（吉兆をもつ人）
Pye	かささぎ（おしゃべりの人）	Hogg	雄のいのしし（機敏な狩人）
Wren	みそさざい（小さな人）	Bullock	雄牛（力の強く、頑固な人）
Heron	あおさぎ（足が長い人）	Hare	うさぎ（足の速い人）
Starling	むく鳥（さわがしい密告者）	Fitch	におい猫（怒りっぽい人）
Swallow	つばめ（長期に不在するも定期的に帰宅する人）	Brock	たぬき（短い足で多毛の人）
Hart(e)	雄じか（機敏な狩人）	Stag	雄じか（機敏な狩人）
Fox	狐（赤髪の人またはずるかしこい人）	Snow	雪（色白の人）
		Coote	おおばん（はげ頭の人）

(c) 皮肉につけられたニック・ネームに由来する姓

King	王（劇でその役を演じたことから）	Russell	赤い髪の人
Bishop	僧正，司教（＃）	Grant	背の高い人
Abbott	修道院長（＃）	Barrett	ずるがしこい人
Pope	教皇（＃）	Curtis	親切な礼儀正しい人
Angel	天使（＃）	Hardy	勇敢な人
Monk	修道僧（＃）	Blunt	金髪の（白色の）人
Nunn	修道女（＃）	Blundel	
Baron	男爵（貴族）（＃）	Blunden	

(d) 事実であったと思われるニック・ネームに由来する姓

Newman	新来者	Mann	召使，下僕，家来
Palmer	（聖地もうでをして，し） （ゆるの葉を持ちかえつ） た人	Bond	耕作者
Freeman	自由民	Ayre	相続人
Goodman	善良な人	Eyre	
Franklin	土地自由保有権者	Friend	友人
Burgess	自由民，市民	Basset	背の低い人
		Bass	

Noble	高貴な、気高い人	{Pettitt	背の低い、小さい人
{Lovell	小さな狼（吉兆をもたらす人）	{Petty	
{Lovett		{Corbett	小さなカラス（色黒の人）
Beal(e)	美しい人	{Corbin	

ウェールズ系のニック・ネーム姓		スコットランド系のニック・ネーム姓	
Lloyd	白髪の人	Cameron	ねじれた鼻の人
Vaughan	小さく可愛い人	Campbell	ねじれた口の人
{Gough		Muir	大きい人
{Gooch	赤髪の人	Kennedy	醜い頭の人
{Goudge			

11)

(3)の愛称 (terms of endearment) はいくつかの分類に分けられているようである。それらは、甘味名称 (honey, sugar, sweet, cookies, etc) と言われるものがあり、親愛感名称 (love, beloved, lover, etc) があり、動物・野菜名称 (kitten, bear-cat, pumpkin, etc) などである。そしてこれらは夫よりも妻に対する名称の方がより変化に富んでいるようである。しかし親族名称において主要関心として強調されるのは権利、義務ではなく、夫妻の個人的性質なのであり、両親としての彼等の共通関心に存し、最終的には夫妻愛であり親の情にたどりつくようである。

‘母’ という名称は正に血統系譜的な範疇にあり、特に核家族においてその位置が重要視されているようである。例えば‘父’を“step-father”から、また‘母’を“step-mother”から、さらに本当の兄弟姉妹を“half-sibling”や“step-sibling”から区別しているのである。

このようにして、もし子供が小さい時から叔父とか祖父母などに育てられている場合であっても、その子に対して母親の役割をつとめる人でも、“just like a mother to me” と言うことであって、決して母とは呼ばれないようである。

## 親族名称・親族組織およびアメリカ文化

アメリカの親族名称組織における親族員たちに対する選択使用できる一連の名称の使用が、その分類的局面、役割指示的局面、あるいはその両方とともに変化するようにであるが、その変化がどちらかと言え、役割指示的局面で大であり、分類的局面に関しては比較的小であるようにである。その一つの含意は、その内部にそれを超さずに、幅広く変化の起る許容範囲をもち、親族構造における一つの基礎的様式が存していると言うことのようにである。どちらかと言え、アメリカ人は直系親組織の広範な変化、傍系親型の広範な変化、さらに親族名称の幅広い変化などというものをあまり示さずに一つの基礎的な形——核家族・血族——を示しているようである。

しかしこの範囲の中において、基礎的な親族的関係、あるいは親族を認めるという点でのそれではなく、役割および間柄という点での幅の広い変化が見られるようである。

「アメリカ人の家庭について目立つことの一つは、それが小さい単位——父・母と子どもであるということだ。世界の多くの地域においては、家庭はずっと大きなものであり、同じ屋根の下に、祖父母も、その息子たちも、息子の家族も住んでいる。しかし米国では、もちろん西洋の多くの地域にもあてはまるが、結婚が核となって一つ一つの結婚が新家庭を作り出すのである。人は両親の家庭で生活を始め、結婚し、自分の家庭をきずいた後も、依然として両親の家族の一員となっている。彼はまた結婚によって妻の家庭にも参加する。そして自分の兄弟姉妹によってきずかれた家庭とか、これらの兄弟姉妹が結婚してはいった家庭と結びつく度合はそれほど密接ではない。そういうわけでアメリカ人は多くの家庭に属しているのだ。……広い親類という大家族の構成員——兄弟や結婚による姻戚だけでなく、いとこ、おじ、人によっては血のつながりのないいとこの

縁者にさえも、大ていの家族はそういう親類をもつ誇りを感じるので。<sup>12)</sup>と書かれているが、「多様性のなかの統一性」というアメリカの理念は少くとも親族組織においては「基礎的統一性に中心をもつ多様性」として言い表わすことができるようである。

次の含意は、親族組織における核家族の中心的重要性についてである。それは親族組織の中の二つある親族集団の一つであり、その徴候は、もう一つの親族集団である血族がどの核家族についても、その家族の生活史において、時の経過とともに重要さの度合が変化し、地域によっても、階級によっても、また民族集団によっても異なっていることを示しているようである。

血族に対するものとしての核家族の中心的重要性を反映する特徴として、まず親のと、自分のとの核家族の内部には詳細な役割分化があって、これらの集団の外側における親族組織の役割分化のレベルがずっと低いようである。この状況は母系的親族組織における父方の母系血統や母の父の母系血統のような、より離隔した集団の内部では、わずかばかりの分化しかないのに対して、自分自身の血統の集団における血統組織に見出される高度な内部的分化を比較することができ、次に分類の選択的方式を示しているそれら少数の選択使用できる一連の名称があるということが言えるようである。ただ例外として、これら選択使用できる一連の名称は分類的な面において変化があり、核家族の内・外の両方で見出されることがあるようである。

このようにして、“parents”という名称およびその対語である“children”あるいは“kids”という名称は、父と母とをなしている一単位を、息子と娘からなるが内部的に分化していない単位と相対置しているようである。

ここで父と母を呼ぶ選択使用できる一連の名称につけ加えて、彼らと一緒に一単位にまとめる附加的に選択使用できる一連の名称が存在することが理解できるようである。

同じように、“old man”や“old woman”という名称が、それぞれ夫および父、妻および母にも適用されるようである。そして“father”あるいは“dad”という名称は、夫と父の両方に、“mother”あるいは“mom”は妻と母の両方にそれぞれ適用されるのである。“old man”や“old woman”がそれぞれ夫・父および妻・母に用いられる階級や地域は、“father”あるいは“mom”がそれぞれ夫・父および妻・母を組合せる階級あるいは地域と同じではないようである。国民全体の中には、非常に違った副次的集団がいくつもあり、その中においてこういうことが見出せるのは非常に一般的な基礎的過程がはたらいっているのであって、単なる階級・地域的な話しぶりの問題ではないことを示しているようである。

一般期に言って、親族名称は、第一次的には話しかけられる人が年令、もしくはその世代において、年上である場合に多用されているようである。しかしファースト・ネームは年令、もしくは世代の等しい人々の間で用いるか、あるいは話し手が年令・世代において話しかけられる人、もしくは話の中に出てくる人よりも年上の場合に用いられるようである。すなわち、父は息子をファースト・ネームで呼ぶが兄弟の子は普通は父の兄弟を親族名称を含めた呼び方——uncle Johnのように——で呼ぶようである。アメリカの文化は身分のせいに帰するよりも、身分を獲得するというように方向づけられているし、それぞれの両親は、彼らの子供が何か適当な身分を獲得することに関心を寄せているのである。その家族員として生まれついた身分はたいていの人々を一生を通じて支えていくには不十分なのである。もし身分が獲得されるはずのものであるならば、アメリカ人の価値感に従うならば、その人の性質と業績とに基づいて獲得されなければならないということになる。つまり「人を判断する基準は、その人がなした業績であり、階級ではない。<sup>13)</sup>」のであり「一国民を理解するには、自然の環境（地理・風土・天然資源・食糧供給・動力資源・および工業化）、人的影響（両親・兄弟・友人・隣人・同僚・教師・警察および他の官吏）、諸制度

(家庭・学校・教会・仲間の集まり・政府・職場)，芸術的表現，イデオロギー（国民的または地方的儀式・憲法・宗教・集団への忠誠・祖先崇拜として表現される）および三つの要求——自己保存・自己再現および自己表明——を達成する方法をしなければならぬ。どの文化も，各部が互いに織りまざってでき上った織物のようなものだ。<sup>14)</sup>」

「普通のアメリカ人は仕事を尊重し，進んで自分の手で働いている。だから例えば，自分と自分に命令を下す社長との間に，階級的な障壁をほとんど感じていない。<sup>15)</sup>」

アメリカ人の信条の中には次のものが暗黙のうちに含まれていると考えられる。つまり合理的なものを信頼すること，道徳主義的な合理化の必要，合理的な努力が重要だという楽天的な確信，個人とその権利の価値を信ずること，庶民を礼賛すること（庶民の権利と集中された政治上の英知に関しての礼賛），変化と進歩を高く評価すること，それから善なるものとして意識的に追求される快楽を高く評価することなどである。年上の世代は年下の世代に向って，親族名称より個人名称を用いるということも，このより広い脈絡の一部としてであって，このことは若い人々があらゆる親族的義務から解放されているという意味でなく，彼の親族としての役割の定義の中で，個人的性質を強調するだけのようである。彼が何かを自分の力で獲得しなければならないとするならば，それは自分の独創性であり，発見的能力を強調しなければならないであろう。しかし年少者から年長者に対して親族名称を使う場合は，年長者の権威と上位性を，また同様に年少者がもっている年長者の安定した地位という見地，しかも年少者はその地位と対等になるべきだ，あるいは追い越すべきだとしている考え方を確証しているようである。一方年長者から年少者へのファースト・ネームの使用は，このように年少者を“up and coming”として見る年長者の見地を確証し，個人としての年少者の性質を強調しているもののようである。

ある意味では、多くの親族関係の全体的複合は、それらの関係が部分となつてつくっているその組織によって子供たちに吹きこまれていくのである。全体としての親族組織は、それゆゑ社会化の仕組みとも言うべきものである。ここに子供のしつけの慣行が母と子の親族関係の局面として取扱いうるようである。子どもはなるべく早い時期に独立させ、自らに頼るようになせるとというのがアメリカ人の考え方であり、乳離れとか用便の訓練などは、他の文化生活圏にくらべたら早い時期に行われるようである。幼児養育の要素は個人の独立、自由、平等が強調されるようである。例えば、アメリカではあたり前になっている哺乳びんによる授乳は乳児を独立した人間として出発させるのに役立っているようであるし、「幼い頃から自分で考えるようにしつけられ、家庭で決定する議決に加わるのだ。子どもたちは自分で選ぶ機会を与えられる。特に自分が好まないことをするように言いつけられた時、強制的な命令に従うのではなく、説明してもらう権利をもっているというのが一般の考え方である。一言で言えば、最も望ましいアメリカの家庭は、各自が権利と義務を持ち、父は立法者、母は執行者、子どもは投票者といったような民主的な家族社会なのである。」<sup>16)</sup> 言い換えるならば、アメリカの家庭では親と子の世界が別々で、しかも個々のメンバーの役割分担をとおして家族に貢献することが前提とされ、しつけは夫婦共通の仕事であり、ルールを守ることの強制と違反に対する制裁という形でおこなわれるのが原則となっている。このような全体的な状況のなかであらわれるのがアメリカの家庭のふんいきなのである。もちろん人間関係はきわめて重要であり、とりわけ母と子のそれは、子どもにとって、何にも増して大きな意味を持っているのは当然であろう。「子どもは家庭で保護され、育てられ、しつけられて一人前になっていく。人間が一人前になっていくのは、何も家庭だけに限られるわけではないが、やはり家庭の持つ意義は大きい。このような社会化の過程は、親が積極的に、子どもに働きかけていく過程と、子ども自身が、無意識的に親を見習ってい

く過程の二つが考えられる。まず前者では、しつけという面で、親が積極的に子どもに働きかけていく場合、何らかの強制をとまなうのがふつうである。そしてこの場合、何より望ましいことは、強制されているという感じを子どもに与えないで、スムーズに子どもに受け入れられ、子どもの心の中に植えつけられていくことである。親の与えるしつけが、子どもに強制と感じられるか感じられないか、抵抗感もなく受け入れられるか受け入れられないかは、家庭全体のふんいきと大きくかかわりあっている。例えば、きびしいしつけがおこなわれている家庭でも、家庭全体のふんいきが、あたたかく明るいものであれば、子どもが主観的に受けとめる感じは、それほどきびしいものにはならないだろう。反対に暗くつめたい家庭では、ほんのわずかのきびしさも、子どもの心に鋭いとげを感じさせるにちがいない。つぎに後者、すなわち、親の意向に関係なく、子どもが自発的に親を見習い、同一化していく過程でも同じことが言える。親をはじめとする個々の家族員の行動や、家族員の織りなすさまざまな人間関係を、子ども自身が好ましいと評価しなければ、それらを自発的に見習うということがおこるわけがない。以上のことから、家庭における子どもの社会化にとって、家庭のふんいきが大きな意味をもっていることがわかる。<sup>17)</sup>」このようにアメリカの家庭のしつけのシステムは、夫婦本位、子どもの世界の承認、ギャランتریという意味での男性のリーダーシップ、しつけの面における夫婦の共同、子どもを含めた家族員のそれぞれの役割をとおしでの家庭作りへの協力などが前提となっているのである。厳密な社会化の価値をこのように乳離れに与えることがむづかしい場合にも、親族生活組織全体の社会化価値を見出すことができるようである。

アメリカの親族組織は、明らかな伝達しうる形でその文化全体の支配的諸価値のエッセンスを具現しているようである。



- 注 1) 藤崎三郎著「家族法概説」鳳舎 pp27～8.  
2) 同書 p36.  
3) 同書 pp31～2.  
4) Michel-Guillaume Jean de Crèvecoeur “Letters from an American Farmer” New York ; Fox. Duffield & Co. 1904. p54.  
5) G・P. Murdock. “Social Structure”, 1949.  
6) 藤崎三郎著「家族法概説」鳳舎 p28.  
7) 同書 p32.  
8) 増田光吉著「アメリカの家族・日本の家族」NHK ブックス p61.  
9) 同書 p86.  
10) 同書 p64.  
11) 木村正史著「英米人の姓名ー由来と史的背景」鷹書房 pp280～2.  
12) ブラッドフォード・スミス著, 梶田一郎他共訳「アメリカの文化と国民性」北星堂 pp65～6.  
13) 同書 p100.  
14) 同書 p7.  
15) 同書 p111.  
16) 同書 p73.  
17) 増田光吉著「アメリカの家族・日本の家族」NHK ブックス pp84～5.

#### 参考文献

1. Winch, R.F ; The Modern Family Holt, Rinehart and Winston, 1963
2. Rodman, H. ; Marriage, Family and Society Random House, 1967
3. Miller, D.R. ; The Changing American Parents Wiley, 1958
4. Gorer, G. ; The American People. A study in national character, 1948
5. Glick, P.C. American Families Wiley, 1957
6. 松原治郎「核家族時代」NHK ブックス
7. ネイサン・グレイザー他著, 阿部齊他訳「多民族社会アメリカ」南雲堂
8. 米山俊直著「アメリカ人を考える」研究社叢書
9. 山崎正和著「病みあがりのアメリカ」サンケイ
10. 板坂元著「アメリカ診断」講談社
11. ジェームス・カーカップ 中野道雄 共著「日本人と英米人」大修館書店
12. 佐藤隆三・季支恵著「日米ダブル教育体験記」ダイヤモンド社
13. エドウィン・O・ライシャワー著, 国弘正雄訳「ザ・ジャパニーズ」文芸春秋
14. 江崎玲於奈著「アメリカと日本」読売新聞社
15. 加藤秀俊著「アメリカ人——その文化と人間形成」講談社現代新書